沙弥の乞食を撃ちて現に悪しき死の報を得る縁　第十五

犬養宿禰真老は、諸楽京活目陵の北の佐岐村に居住む。天骨邪見にして乞ふ者を獣悪む。帝姫阿倍天皇の代に当りて、一の沙弥有り。真老の門に就きて食を乞ふ。真老乞ふ物を施さずして、返りて袈裟を奪ひて諸り見て逼し悩して言はく「汝は曷の僧ぞ」といへば、乞ふ者答へて曰はく「我れは是れ自度なり」といふ。真老また拍ち逐ふ。沙弥大に恨みて去る。其の日の夕に、煮たる鯉寒凝る。明日の辰時に、朝床に起居て彼の鯉を口に含み、酒を取りて飲まむとすれば、口より黒き血を返り吐きて傾き臥し、幻の如くして気絶え、寐るが如くして命終る。諒に知る、邪見は身を切る利き剣なり、瞋心は是れ禍を招く疾き鬼なり、慳貪なるは餓鬼を受くる苦の因なり、多欲なるは慈施を障ふる猛き藪なることを。ただし来り乞ふ者を見ば、憐愍を生して和ぎたる顔と悦しき色とをもちて、法施財施すべし。所以に丈夫論に云はく「慳る心多き者は、是れ泥土なりといへども金玉より重す。悲ぶる心多き者は、金玉を施すといへども、草木より軽す。乞ふ人を見る時には、「無し」と言ふに忍びず。悲び泣きて涙を堕す」とのたまふ。

第十五縁　悪業についての現報説話。
一 未詳。本説話以外に所伝をみない。
二 菅原伏見東陵。垂仁天皇陵。奈良市尼辻町小字西池に所在。
三 奈良市佐紀町あたり。
四 それどころか逆に。
五 底本訓釈「諸見〈トヒナシリ〉」。おまえは誰だ、という目つきで見る意か。『敦煌文献語言詞典』に、「諸問」を弁問、勘問、としている。
六 →上巻十九縁。
七 煮凝(にこ)りができた。
八 午前七時から九時のころ。
九 朝寝の床。
一〇 本説話を、梵網経の第八重戒の慳惜加毀戒を説く説話として把握し、梵網経の「悪心、慎(瞋)心」をもって布施を行しないことを諫めた記述と本説話の「瞋心」とを関係づけようとする中村史の説がある。
一一 「捷疾羅刹」(大般涅槃経後分・下)のこと。足がはやい。儺祭詞にみえる「礦悪伎疫鬼(けがらはしき)」とは無関係であろう。
一二 布施を三種にわかち、法施、財施、無畏施、とする。
一三 大丈夫論・施慳品、財物施品。諸経要集・六度部・福田縁。

第十六縁　標題に「得=現報」縁」とあるが、「現報」の語が悪い報を意味している。また、女の死後の苦難を離脱する説話を「現報」と把握している。いずれも本書の他の説話の標題とは異なった論理に拠っている。
一四 未詳。本説話以外に所伝をみない。
一五 夫の意にまかせて妻を離婚できる七条件(七出)のひとつにも数えられる(戸令)。

女人濫しく嫁ぎて子をして乳に飢ゑしめて故に現報を得る縁　第十六

横江臣成首女は、越前国加賀郡の人なり。天骨婬泆しくして、濫しく嫁ぐことを宗とす。いまだ丁の齢を尽さずして死にて淹しく年を歴たり。紀伊国名草郡能応里の人寂林法師、国家を離れ他国を経て、法を修ひ道を求めて、加賀郡畝田村に至り、年を逕て止住る。奈良宮に宇大八嶋国御めたまひし白壁天皇の世の宝亀元年庚戌の冬十二月の二十三日の夜に、夢に見らく「大和国鵤鶴の聖徳王の宮の前の路より東を指して行く。其の路鏡の如し。広一町ばかり、直きこと墨縄の如し。辺に木草立てり。林草の中を佇看れば、大快しく肥えたる女有り。裸衣にして踞る。両の乳脹れて大にして竈戸の如く垂り、乳より膿流れ、長跪きて手を以ちて膝を押し、病む乳を臨て言はく「痛、乳」といふ。呻吟ひて病に苦ぶ。林問ひていはく「汝は何の女ぞ」といふ。答

一六 兵役、課役の負担義務のある年齢が「丁」。男は二十一歳以上(戸令)。七五七年以降は二十二歳以上とされた(類聚三代格・十七)。女のばあいには適用できない。未詳。
一七 和歌山市。下巻三十縁に「名草郡能応村」「能応寺」がみえる。
一八 未詳。本説話以外に所伝をみない。
一九 石川県金沢市畝田町あたり。
二〇 光仁天皇。
二一 七七〇年。この日がどのような意味をもっているのかは不明。六斎日ではある。
二二 斑鳩宮。法隆寺東院がその跡地とされる。本説話の七七〇年のころにはすでに斑鳩宮は無く、東院が建てられていた。越前国での夢にその地が登場するのは東院の夢殿にかかわるか。
二三 道幅が一町ある。一町は一〇六㍍余。→中巻二十四縁。平城京の朱雀大路は幅七〇㍍を超えるが、それよりもはるかに広い。異様なイメージである。
二四 →中巻十六縁。
二五 下巻二十二縁に冥界の三道を述べて「一道広平、一道草小生、一道以巌而塞」とする。本説話にも広平なる一道が示され、さらに「辺木草立」とされるのは、木の生えた小道と草の生えた小道とが述べられている可能性がある。
二六 寂林。
二七 →中巻十六縁。
二八 釜(かま)、鍑(りょう)、鍋(なべ)などを竈(かまど)の火にかけて煮炊きするばあいには、釜、鍑、鍋の底部は竈の内側に落ちこんで垂れさがった状態になる。そのような状態を念頭に置いての形容であろう。他に例をみない、印象的な形容といえよう。
二九 ああ、乳。